

よびごえ

けしゴム まどみちお

自分が書きちがえたのでもないが
いそいそと けす

自分がよごした よこれでもないが
いそいそと けす

そしてけすたびに
けつきよく 自分がちびていつて
きえて なくなってしまう
いそいそと いそいそと

正しいと 思ったことだけを
ほんとうと 思ったことだけを
美しいと 思ったことだけを
身がわりのように のこしておいて



浄土真宗

仏光寺派
光明山
光善寺

〒915-0802
越前市北府2丁目2-18
TEL 0778-22-1222

私たちは、消しゴムの身の上をこんなふうに思いやったことがあるだろうか。書き損ないを消す道具、安い文房具くらいにしか見ていないだろう。

「身を殺して仁をなす」という儒教の教えがあるが、消しゴムはそんな大上段に構えたことは言わないで、黙って自分のなすべきことをなして消えてゆくのだ。

書いたことの間違ひは、消しゴムで消せるが、言うたことの間違ひはどうして消したらよいのだろう。

人間には幸いに、忘れるというはたらきがあるので、忘れてくれれば好都合だが、いやなことは存外に、いつまでも覚えているものだ。

「すみませんでした」とあやまることが、忘れる以上のはたらきをするのかもしれない。その一言で相手の人間を見直し、さらに心の交わりが深くなるということもある。第一は、お互い間違ひのし通しの自分であることを念頭に深く刻んで、「絶対頭の上げようのない奴、そのくせ、頭を上げ通しの奴、それがおのれの正体」と知るべきだ。

米沢英雄

『心の詩』



大東出版